

都市政策・地域経済ワークショップ2 第1回 議事録

【テーマ】土庄町（小豆島）の持続可能な観光まちづくり

【講師】蓮池 幹生（土庄町商工観光課 課長）

【担当教員】池田 千恵子 准教授

【日時】2025年9月26日（金）18:30～21:20

【場所】大阪公立大学大学院 都市経営研究科 梅田サテライト 101教室

【参加者】都市政策・地域経済コース M1 学生 他

■ 講義概要

本講義では、香川県小豆島の現状と課題を踏まえ、観光を軸とした持続可能な地域経営の実践について報告が行われた。人口減少や観光需要の変動を背景に、伝統産業の再評価、インバウンド対応、アニメ・フィルムツーリズムの展開、地域ブランド形成など多様な戦略が紹介された。特に「持続可能な観光（サステナブルツーリズム）」を主眼とした取り組みが強調され、観光による一過性の消費ではなく、地域社会全体の持続性を高めることが目標とされている。

■ 講義内容

1．小豆島の概要

香川県に位置する小豆島は、土庄町と小豆島町の二つの町から成り立ち、観光資源としてオリーブ（国内シェア1位）、そうめん（三大産地）、木桶仕込みの醤油などが知られている。年間観光客数はおよそ100万人で、最盛期には150万人に達したものの現在は減少傾向にある。また、人口は1955年に約5.6万人であったが、現在は約2.4万人にまで減少しており、今後さらに減少することが予測されている。

2．観光動向と課題

瀬戸内国際芸術祭の開催によって3年ごとに観光客数が大きく増加しており、来訪者の内訳を見ると関西方面からが約3割、関東圏からも3割弱を占め、近年ではインバウンド需要も拡大している。さらにSNSを通じた発信力も高く、自然景観や食文化に関する投稿が多く見られる。一方で課題として、日帰り観光客の増加に伴い宿泊者が減少しており、その結果として経済波及効果が小さいという問題がある。特に宿泊者一人当たりの消費額（約3万円）が日帰り客（約7千円）と大きく異なり、地域経済への影響が懸念されている。

3．小豆島観光ビジョン

小豆島では「観光による消費される島ではなく、観光によって持続できる島」を目指す観光ビジョンを掲げている。この理念のもと、観光を地域経済の基盤としつつ、自然・文化・人々の暮らしが共存する地域づくりを進めている。観光を一時的な経済活動ではなく、島全体の持続可能性を高める手段として位置付けており、住民が主体的に参加することを重視している。

4．サステナブル観光の推進

小豆島は観光ビジョンの理念のもと、観光を地域経済の基盤としつつ、自然・文化・人々の暮らしが共存する地域づくりを進めている。観光を一時的な経済活動ではなく、島全体の持続可能性を高める手段として位置づけ、住民が主体的に参加することを重視している。

また、小豆島は国土交通省が推進する「日本版持続可能な観光ガイドライン（JSTS-D）」に基づく取組みを進めており、環境・社会・経済の三側面のバランスを保ちながら、観光を通じて地域の幸福度を高めることを目指している。特に、観光の質的向上や地域資源の適正利用、観光客と住民の共生、データに基づく改善サイクルの確立が重視されている。

その中で、土庄町と小豆島町が協力して観光協会を一本化し、国際認証「グリーンデスティネーションズ・シルバーアワード」を獲得した。これは国内3例目であり、両町が連携して受賞した事例としては日本初である。この取組みはインバウンドや教育旅行の増加にも寄与している。

5. 新しい観光戦略

小豆島では観光戦略の一環として、冬季観光の強化に取り組み、エンジェルロードでのプロジェクションマッピングや食を活用した誘客が行われている。また、インバウンド対応として高松空港からの直行便拡充、英語・中国語での観光案内、さらに通訳ガイドの養成が進められている。加えて、アニメ・フィルムツーリズムの展開も活発で、アニメ『からかい上手の高木さん』を活用した地域振興や、アニメファンによる聖地巡礼・さらには「聖地移住」と呼ばれる現象まで生まれている。実写映画の全島ロケも行われ、地域経済や住民意識に大きな影響を与え、ロケーションジャパン大賞「地域の変革部門賞」を受賞するなど、地域の新しい観光資源として注目を集めている。

6. 地域産業とブランド化・雇用促進

地域産業のブランド化も進んでおり、オリーブ果実の絞りを飼料として活用する循環型農業による「オリーブ牛」は高級ブランド牛として高い評価を受けている。ハモは規格と流通を厳格化し、関西市場で高単価を実現した。そうめんや醤油もサミット開催やメディア露出により再評価され、「島の光」そうめんや木桶仕込み醤油が地域ブランドとして定着している。

また、観光関連産業の活性化を通じて地元での雇用創出を図り、宿泊業・飲食業・交通業などの人材育成を重点的に進めている。さらに、ワーケーションや地域留学といった新しい働き方を取り入れ、外部人材と地域人材が協働する新たな雇用モデルが形成されつつある。

7. 「20年先の小豆島をつくるプロジェクト」

土庄町と小豆島町は共同で「20年先の小豆島をつくるプロジェクト」を推進している。このプロジェクトは、人口減少や高齢化が進む中で、次世代へ引き継ぐべき「島の未来像」を住民とともに描く長期的な地域戦略である。観光を核としながらも、教育、産業、環境、福祉など多分野を横断的に結びつけ、地域全体の持続可能な発展を目指している点が特徴である。特に、若者や移住者の参画を促す仕組みづくりに力を入れており、「小豆島で生きる意

味」を再定義する対話型ワークショップや、高校・大学と連携した地域課題解決型学習（PBL）などが実施されている。

また、行政主導ではなく住民や民間企業が主体となって小規模な実験的プロジェクトを積み重ね、地域の自立性を高めていく「ボトムアップ型まちづくり」を重視している。島内の観光地や生活圏をデジタル技術で結ぶ「スマート島構想」との連携も検討されており、将来的には環境負荷の少ないモビリティや再生可能エネルギーを活用した循環型地域モデルの実現を目指している。

「20年先の小豆島をつくるプロジェクト」は単なる観光振興策にとどまらず、住民一人ひとりが「未来の担い手」として関わる持続可能な島づくりの実践である。

8. インクルーシブな取組み

小豆島の観光政策では、「誰もが楽しめる観光地づくり」を理念として掲げている。高齢者や障害者、子どもを含む多世代が安心して滞在できるよう、バリアフリー化を進めるとともに、段差の少ない遊歩道や多目的トイレの整備が進められている。観光施設だけでなく、港や商店街など生活空間にも配慮を広げ、「暮らしと観光の共存」を意識した整備が特徴である。

外国人観光客や教育旅行の受け入れも積極的に行っており、英語・中国語対応の案内板の設置や、通訳ガイドの育成など、多文化共生を意識した取組みが進められている。また、地域の子どもや学生がボランティアとして観光イベントに関わる機会を設け、「地域全体で観光を支える文化」を育てている。小豆島では観光を通じて社会的包摂（インクルージョン）を実現することを目指しており、観光が地域福祉や教育と連動する新たな地域モデルとして注目されている。

■ 質疑応答

Q) 今後、冬季観光の強化に向けて、キャンプ需要をどのように取り込んでいくか？

A) 小豆島ではアウトドアブランド「モンベル」と連携し、「フレンドアイランド」としてキャンプやハイキングを推進している。障害者を含め誰でも楽しめるキャンプ場整備を進めており、アウトドアを通じた多様な施策を展開していく予定である。

Q) 1、強い熱意はどこから生まれているのか？

2、観光組織の運営体制はどのようになっているのか？

A) 1、特別な背景によるものではなく、純粋に地域を良くしたいという思いからである。

2、組織は二町の首長が方向性を一致させ、課長レベルで施策を提案・推進している。小規模自治体であるため意思決定が迅速で、行政と民間が一体となるプラットフォームが機能している。

Q) 認証取得後、他自治体からの視察や連携はどのように増えているのか？また、エネルギー事業への取り組みはあるか？

A) 認証を契機に全国や海外からの視察・連携が増加している。エネルギー面ではゼロカーボンを目指すプロジェクトを立ち上げ、ブルーカーボンを含めた新たな取り組みを進めている。

Q) 課題の把握方法や独自の発想力はどのように生まれるのか？

A) 発想は日常的に多様な事象に関心を持つことから生まれる。課題は住民とのワークショップで徹底的に議論し、子どもでも理解できるよう簡潔にまとめている。発想力は挑戦心と結びついており、新しい取り組みを続けることが重要である。

Q) 観光協会の窓口一本化に際してどのような課題があったのか？また、アニメ・聖地巡礼の戦略はどのように展開しているのか？

A) 統合は困難を伴ったが、「観光客満足度向上」という目的を掲げて合意形成を進めた。アニメでは地域事業者とのコラボ商品を現地限定で販売し、ファンを誘致している。毎年少しずつ新要素を加えることでリピーターを確保している。

Q) 観光ビジョンの数値目標はどのように設定しているか？また、地域文化教育や開発と住民利益の調整はどのように行っているか？

A) KPIを設けつつも過度に縛られず、アクションプランを一つずつ実現している。教育面では「出前講座」を通じて子どもに地域文化を伝えている。開発では自然に調和する低層施設を基本とし、ゾーニングや住民説明を徹底している。

Q) 島内交通の利便性改善やシェアサイクルの整備はどのように進めていくのか？

A) 交通整備は大きな課題であり、シェアサイクルや自動運転車の導入を進めている。今後、段階的に改善していく。

Q) 今後のスマートシティ展開において、小豆島のような地域はどのような役割を果たせるか？

A) 国内大都市では住民合意形成が難しい一方、地方では人口減少により余白があり、新しい試みを受け入れやすい。小豆島のような地域は実証実験のフィールドとして有望である。

Q) インバウンドにおけるターゲット設定はどのように考えているか？

A) 「人数×単価」という視点が重要である。

新規層の開拓も含め、より良いサービスを提供し、単価を上げる方にシフトしている。

口コミを通じた新規誘客も見込まれる。

以上

(議事録作成：都市政策・地域経済コース 修士課程 1年 林 ギョク軒)